

[生徒指導]

卒業に向けた不登校傾向解消への取組 - 個別支援・学級づくり・学校支援体制づくりを通して -

岡田 明子*

1 問題の所在

(1) 今日の課題から

文部科学省が示す令和元年度（2019年度）の不登校児童生徒数は、18万人にも及んでいる。7年連続で増加している。在籍児童生徒数に占める不登校児童生徒の割合は1.9%である。1,000人当たりの不登校児童生徒数の全国平均が18.8人であるのに対して、新潟県は16.9人と平均に迫る人数となっている。（文部科学省調査結果令和2年12月4日発表）不登校の未然防止や解消は、全国的にも新潟県内においても大きな課題と言える。

(2) 児童の実態から

担任した6年生の学級には、4年生から不登校傾向を示すようになっていたA児がいた。A児は、4年生の夏休み明け、夏休みの課題が終わっていないことを不安に思い、登校をしづつた。また、給食に対する不安を口にしたたり、登下校のバスの中での友達とのトラブルについて悩んだりする様子があった。学校に対する恐怖心も抱いていた（養護教諭の保健日誌の記載や当時学校にいた職員の話から状況を把握）。それらの不安要素からか教室に入ることができなくなり、別室（校長室）で過ごした。5年生になってからも、教室に入ることができず、他の児童と会うこともなくなった。朝、通常の登校時刻より前に保護者に送ってもらい、挨拶をして早退する日々を続けたからである。6年生になり、小学校生活最後の1年が始まった。A児は、6年生になってからも早朝に登校し、挨拶をしてから早退していた。

(3) 先行研究から

村田（2019）は、不登校の子どもが再び登校できるように回復していく過程を8つの段階を通して説明している。各段階で大切なことが説かれている。初期段階（1～2期）では、子どもの言葉を真剣に聞き、苦しみを受け止めること、中期段階（3～5期）では、登校刺激を与えず、専門機関の指導を受けながら児童に対応していくこと、後期（6～8期）では、登校への問題について相談に応じながら、登校した時の受け入れ態勢を整えておくことである。A児が4年生の時、不安や苦痛、恐怖を訴えていた頃が初期段階であり、5年生の時、体調不良から登校できなかつたり、またそれに対してふさぎ込んでいたりした頃が中期段階であったと考えられる。そして、6年生になり、これまでの自分の生活へのあきらめ、自己受容をし始める後期段階に入っていくと考えた。それであるならば、後期段階の対応として、登校への問題について相談に応じながら、登校後の受け入れ態勢を整える必要がある。

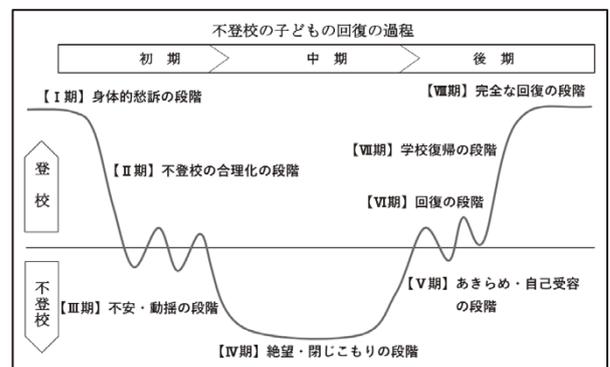


図1 不登校の子どもの回復の過程 (村田 2019)

石川（2020）は、不登校の児童に対する個別の支援と教室に入って落ち着いて過ごすことができるようにするための学級集団づくりを統合的に行うことが必要だと説いている。担任一人ではなく、学校体制で組織的かつ具体的な対応を行うことが必要だと述べた。これらの支援が、不登校傾向を解消する糸口に成り得る可能性がある。A児が安定して登校すること、そして教室で過ごす時間を増やすなどを目標に支援を行い、さらには卒業式という大きな行事を見据えて、個別支援、学級づくり、学校支援体制づくりの3つを統合的に実践していくこととする。対象児童の変容を通して、その効果を明らかにし、変容を整理、分析することで、今後の不登校児への対応に寄与できると考えられる。

* 柏崎市立米山小学校

2 研究の目的

不登校傾向が見られる児童に対して、個別支援、学級づくり、学校支援体制づくりの3つを統合的に行う実践を通して、対象児の変容を分析しその結果を明らかにする。また、A児にとっては小学校生活最後の1年であり、中学校に向けた準備期間の1年でもあるため、進路を決めることや卒業式に参加するという点を大きな目標として見据え、その変容や成果を明らかにし、今後の不登校傾向児の対応に寄与できると思われる事実を積み上げることを目的とする。

3 研究の内容・方法

(1) 実践の構想

4年生時は、登校後別室（校長室）で学習するという過ごし方であったが、5年生になると、早朝登校後挨拶をして帰宅していたため、学校での滞在時間が10分程度であった。このような状況から、今後A児がたどるであろう回復の過程を段階的に考えた。①安定して登校する、②学校での滞在時間を増やす、③教室に入る、④教室で過ごす時間を増やす、⑤卒業式という大きな行事に参加する。A児が、これらの項目について段階的に行動することができるように、個別支援、学級づくり、学校支援体制づくりの3つの観点での取組を考えた。

① 個別支援

週1回程度の定期的な家庭訪問により、A児および保護者との信頼関係を築き、A児との学習時間を確保する。A児の言動をよく見取り、その状況に応じて支援策を講じていくことで、A児ができることを少しずつ増やしていくことをねらう。保護者と連絡を取り合い、家庭訪問の日時を決定する。

② 学級づくり

A児が学級児童とのつながりをもてるように、担任が架け橋となり交流ができるようにする。A児が教室に入ることができるようにするための支援として、学級児童にも働きかけを行う。

③ 学校支援体制づくり

A児が学校滞在時間をのばすためには、居場所を確保することや指導にあたる職員の配置が必要である。そのため、学校職員へのA児への理解を図るとともに、学校としての協力体制を整える。

- ア) 不登校対策委員会を毎週実施し、現状の確認と対策等について学校職員で共有、検討し、学校全体で対応する。
- イ) 担任がスクールカウンセラー（以下SCと省略）と定期的な面談をし、A児への働きかけについての情報を共有し、アドバイスを随時もらいながら支援を続ける。
- ウ) 相談室をA児の居場所として確保し、そこを拠点に学校滞在時間をのばしたり、活動場所を広げたりすることをねらう。
- エ) A児本人との相談により、オリジナルの時間割を作成し、教科担当の職員が指導にあたる。様々な人（教師）との関わりを増やす。
- オ) SCとA児および、A児の両親の面談を月1回程度設定する。
- カ) 学校（担任と管理職）と両親との面談を定期的実施し、支援体制について確認し、目標を共有する。

(2) 児童の変容の確認方法

- ① A児が学校で過ごしているときの様子や発言、学習への意欲・学習ノートの振り返りの記述等に変容を見取る。
- ② A児の月ごとの学校滞在時間、欠席日数をまとめる。月の学校滞在時間合計から、1日の平均滞在時間を計算して記録する。学級で過ごした時間（教室の滞在時間と学級児童と学習や活動をした時間）も記録する。
- ③ 卒業式の参加方法の決定及び、練習への参加態度を見て、A児の変容の様子をまとめる。

4 研究の実際

(1) 4～8月の取組

① 個別支援

A児とは、学校で会って話す時間をもつことが難しい状況にあったため、個別支援として定期的な家庭訪問を続けることとした。毎週1回程度、放課後の時間を使って訪問し、A児にとって無理のないように短時間から始めた。高橋（2009）は、教師という指導する立場より一歩児童に近づいた、年齢差の少ない信頼できる『メンタルフレンド』になるような関わり方をすることにより、児童との心理的な距離を縮めて気軽に話すことができるようになる」と説いている。

初めは、何気ない会話で楽しませ、多くの話題を共有し、安心感をもたせるようにした。A児はだんだんと打ち解けていき、自分のことや、家でどのように過ごしているかなども話すようになった。5年生の時に始めた通信制個別塾の課題を家でどのように学習しているかについても話してくれた。1回1時間程度の家庭訪問を定期的に重ねていくうちに、教科書を一緒に読んだり、問題を解いたり、またA児が好きな図画工作の工作や社会の学習を進めたりすることができるようになった。家で図工の作品を作り、完成した作品については、学級の児童たちの作品と共に教室や廊下に展示し、評価をした。学級の児童たちからのコメントをA児に伝えた。担任と気軽に色々な話ができるようになったり、学級の児童とのつながりがもてるようになったりしたことで、夏休みに入る前頃から、家庭訪問時に学習した続きを学校でも取り組めるようになった。そして、学校の滞在時間を少しずつのばせるようになった。

② 学級づくり

A児は、5年生から6年生前半にかけて、学校の他の児童と過ごす時間がほとんどない状況だった。早朝挨拶をしてからは、早く帰りたいようにする様子があった。そのような中で、少しでも学級の児童たちとのつながりをもてるよう、学級の児童との共通の興味事項を見つけ、家庭訪問時の話題にした。A児も学級の児童たちも読んでいた漫画があった。その話題で互いに質問したり答えたりするやり取りの仲介を行い、交流の一端とすることができた。時には、学級児童の様子を写真に撮ってA児に見せた。

③ 学校支援体制づくり

学校では、毎週、不登校対策委員会を実施した。A児の現状と対策や対応について学校職員で共有し、検討した。学校職員が、それぞれの立場でA児に関わり、前向きに接したことにより、A児にとっていろいろな人と関わる時間が少しずつ増えていった。また、学校職員からの担任への助言や励ましがあり、支援の一助となった。

また、担任がSCと定期的な面談をし、A児への働きかけについて情報を共有し、助言を随時もらいながら支援をした。A児が学校滞在時間をのばすための働きかけの方法を検討し、A児が抵抗なくできそうなこととしてマスク作りを考えた。7月、保護者と連携し、学校滞在時間をのばすための1つのきっかけとして、家にはない学校のミシンを使って、「みんなのためにマスクを作ってもらえないか」と提案した。普段、挨拶後に帰るところ、担任から「お願いがあるのだけど。」と声をかけた。A児はこの提案に応じ、保護者付き添いで相談室に入ることができた。A児は初め、学校に残ることを快く思っていない様子で、そわそわしたり、トイレに行ったりした。その後も、保護者が付き添える日を把握し、その日に、マスク作りをお願いをした。マスクが完成した時には、マスクを作ったことへの賞賛をし、学級の児童たちへ届けに行くことを提案した。すると、A児は、その提案にも応じ教室に入ることができた。A児自身、皆にほめられたことで、自分が役立ったことへの充実感を得ることができ、心が前向きになってきたと考えられる。

(2) 9～12月

① 個別支援

A児は、学校での滞在時間をのばせるようになったことで、今まで取り組んでいなかった学習教材やテストに取り組むなど、少しずつ意欲を見せるようになった。登校後、その日の学習計画を確認し、A児のがんばりに対して賞賛する声をかけ続けた。

11月から、A児オリジナル時間割を作り、自分で決めた学習を行うことができるようにした。(図2)オリジナル時間割使用開始と同時に、保護者の協力を得て、トークン(1週間自分で立てた計画が達成できたらご褒美)を行い、達成感を感じられるようにした。A児のがんばりがはっきりと目で見えて分かるオリジナル時間割とトークンは、A児にとって大きな励みになるものであったと考える。

② 学級づくり

学級の児童とA児が負担にならない程度(週1回程度)、手紙を書いて、A児に渡すようにした。普段の何気ない一言や質問などを学級児童が小さめの紙に書き、A児に渡した。また、誕生日を祝うカードを作って届けた。少しでもあるが、つながりを断つことがないようにし、教室に入ることを促した。

表1 A児の学校滞在時間の変遷

	4月	5月	6月	7月	8月
登校日数	10日	14日	22日	21日	9日
学校滞在時間	3h40m	2h42m	4h4m	12h10m	9h29m
1日の滞在時間	10m	10m	11m	34m	1h3m
欠席日数	0日	1日	0日	0日	2日

表2 A児の学校滞在時間の変遷

	9月	10月	11月	12月
登校日数	18日	20日	19日	17日
学校滞在時間	16h42m	28h17m	33h35m	63h10m
1日の滞在時間	55m	1h20m	1h45m	3h40m
欠席日数	2日	1日	0日	0日

③ 学校支援体制づくり

不登校対策委員会での検討を通して、相談室をA児の居場所として確保し、そこを拠点に学校滞在時間をのばしたり、活動場所を広げたりすることをねらった。11月から始めたオリジナル時間割の学習内容を進めるにあたり、相談室が大事な役割を果たした。

A児が立てた時間割の内容を実際に行えるように、教科担当の職員が直接指導にあたり、課題を出して取り組めるようにしたりした。A児は、教科担当の職員との関わりをもつことで、人との関わりが増えた。A児が得意な社会では、テストを受ける時に、「100点を取りたい。」という意欲的な言動が見られた。

(3) 1～3月の取組

① 個別支援

A児が自分で決めた学習計画と学級の時間割を照らし合わせて、A児が参加できそうな学級の授業には参加するように促した。初めは、A児が得意な教科(社会)の授業へ参加し、徐々に参加できる教科を増やしていった。教科の学習への参加が可能になり、6年生を送る会の準備や卒業式練習にも参加した。

② 学級づくり

卒業が近づき、6年生は卒業アルバムや文集作りに取りかかった。A児にも声をかけ、一緒に制作活動を行った。卒業文集の作文はパソコンで入力したため、パソコン室で他の6年生と過ごす時間をもつことができた。文集の内容についてみんなで相談し、コミュニケーションをとっていった。

③ 学校支援体制づくり

SCとA児および、A児の両親の面談は、月1回程度継続した。A児がSCと話す時間、両親がSCと話す時間の両方を確保した。両親は悩みや不安、どう対応したらよいかなど、普段考えていることをSCに話すことで、面談後には、すっきりした表情になったり、前向きに動き出そうとしたりする様子だった。

また、学校(担任と管理職)と両親との面談を実施し、支援体制や目標を共有した。A児だけでなく、保護者にとっても苦しい時期が長く続いていることが想像できたため、その胸の内を吐き出してもらうことは大きな意味をもつと考えた。保護者が普段感じていることやこうなってほしいという願いを聞き、共感するよう努めた。繰り返し面談を実施し、保護者のA児への思いを知ることができたことで、学校と家庭とで同じ目標に向かって支援にあたることができた。

(4) 卒業に向けた取組

～卒業式参加プロジェクト～

① 個別支援

A児は、これまでほとんどの学校行事の時に欠席していた。予期不安を抱く傾向があるからだ。緊張する状況が予想されたり、その状況になったりするとトイレに行く姿が見られていた。そこで、不登校対策委員会で卒業プロジェクトを立ち上げ、A児が参加できるようにする方策を検討した。個別支援としては、A児にとって緊張する場面や時間を少しでも減らすため、A児を含めた卒業生の座席の位置を変更する(対面式にしない)ことや式の中での卒業生の動線を工夫する(一度トイレに行くことができるようにする)ことにした。この変更点については、A児の保護者はもとより、卒業生全員の保護者にも理解してもらい、決定した。合理的配慮に基づく、学校行事の内容変更となった。

② 学級づくり

6年生にとって重要な行事である卒業式について、A児が参加できる形式をとることを学級の児童に説明し、理解を求めた。A児以外の6年生は、「これまで一緒に育ってきたA児と、一緒に卒業したい。」という思いを抱いており、卒業式の形式変更へ快諾してくれた。A児は、みんなと一緒に、その形式での練習を重ねることができた。1月、A児は卒業式に出ることを目標に掲げ、式の練習に出たり、卒業文集の内容を考えたり、学級児童との活動時間を増やしたりした。また、A児は学校行事の6年生を送る会にも参加する意志を固めた。6年生と共に劇の発表の練習をしたり小道

図2 A児オリジナル時間割(11月)

表3 A児の学校滞在時間の変遷

	1月	2月	3月
登校日数	12日	17日	18日
学校滞在時間	72h50m	125h	128h55m
1日の滞在時間	6h10m	7h20m	7h15m
欠席日数	1日	1日	0日

具を作ったりして、交流する時間が増えていった。4年生後半から一緒に過ごせなかった時間を取り戻すかのように、色々な話題の会話を楽しんで過ごす姿が見られた。最終的に1月以降は、ほぼ毎日登校し、1日学校で過ごすようになった。他の児童と同様に通学バスで登下校ができるようになった。

③ 学校支援体制づくり

A児の卒業式への参加意思が固まり、保護者との相談の上決定した卒業式の形式を変更することについて、学校職員全員で共通理解して支援にあたった。座席の変更に伴い、他の座席や物品の配置についてのすり合わせや、A児が一旦退席する動きに合わせて養護教諭に付き添ってもらうことにした。また、管理職は、式が始まる前に、来賓に事情を説明し、理解を求め了承を得た。

～進路相談プロジェクト～

① 個別支援

校内では、A児の状況から中学進学を考えたとき、A児が少しでも安心して、A児らしく中学校生活を送れる環境は、通常学級か特別支援学級、または特別支援学校のどこなのだろうかと、悩んでいた。そのため、9月に、進学先を決定するための判断材料となる、市の就学相談を申し込むことにした。まずは保護者に、就学相談を申し込むことについての理解を得られるよう、保護者面談を行った。だが、初めは支援を受けることに抵抗がある様子であった。特別支援学級と特別支援学校の先生と実際に会い、相談をする中で、支援を受けることでA児のできることが増やせるかもしれないという期待がもてるようになったようだ。その後、順調に支援を受ける話を進めることができた。

5 成果と考察

(1) 回復の過程に沿った、3つの取組

A児が不登校傾向を示すようになった4年生の夏休み明けから、学校滞在時間を最大限までのばした6年生までの経過を見ると、村田(2019)の説いていた、不登校回復までの過程において、A児は6年生になってからが回復の後期に入り、だんだん自信を取り戻し、学校生活への意欲がわいてきたのではないかと考えられる。回復への過程に照らし合わせて、個別支援・学級づくり・学校支援体制づくりの3つの取組を行ったことで、A児への支援が成果をあげたと考える。

(2) オリジナル時間割カードによる取組

① 初期(11月中)

A児は、6年生の9月頃から相談室に入り、4月は10分程度だった学校滞在時間を少しずつ増やしていった。11月に入り、オリジナル時間割カードを使って計画を立て、相談室で学習を進めることができるようになった。A児は、予め決めてきたオリジナル時間割に沿って活動し、帰る前に、学習した内容と振り返りコメントを書いた。学習した内容を振り返り欄に書いていた。

② 中期(11月下旬～)

自分で立てた学習計画に沿って学校で過ごし、1日の振り返りコメントを書いて帰るとい学校生活の流れが定着し、11月下旬には、「楽しかった。」という言葉が書かれていた。学校で過ごしたことについて、自分が活動したことだけでなく、感じたことも表出できるようになっていた。

③ 後期(12月中旬～)

他児との交流がほとんどないA児だったが、学校滞在時間をのばせるようになってきて、休み時間に体育館やグラウンドで他の児童と遊ぶ姿が見られるようになった。12月中旬、学級児童と一緒に過ごすきっかけとして、体育の授業で「一緒にバスケットボールの試合をしよう。」と声をかけた。数分ではあったが、バスケットボールという競技を通して、学級児童と共に楽しむ時間をもつことができた。

月	来校時間	学習内容	帰宅時間	ふりかえり
12/14	7時 30分	国語 2年生の国語 理科 2年生の理科 体育 2年生の体育	10時 50分	国語、理科、体育の授業が楽しかった。体育の授業でバスケットボールの試合をした。楽しかった。
12/15	10時 50分	社会 1年生の社会 国語 2年生の国語	1時 10分	社会の授業が楽しかった。国語の授業も楽しかった。
12/16	7時 30分	算数 2年生の算数 理科 2年生の理科 体育 2年生の体育	10時 50分	算数、理科、体育の授業が楽しかった。体育の授業でバスケットボールの試合をした。楽しかった。
12/17	7時 30分	社会 1年生の社会 国語 2年生の国語 理科 2年生の理科	11時	社会、国語、理科の授業が楽しかった。体育の授業も楽しかった。
12/18	1時 30分	理科 2年生の理科 算数 2年生の算数	3時 50分	理科、算数の授業が楽しかった。体育の授業も楽しかった。

図3 A児オリジナル時間割(12月)

12月下旬には、教室に入って学級児童と共に授業を受けることができた。ついには、1日中学校に居られるようになった。みんなと授業を受けた日や、お楽しみ会で一緒に活動した日には、「みんなと楽しく過ごせてよかった。」と記していた。年明けの1月には、「卒業式までみんなと一緒にいられるようにしたい。」や「小学校生活に悔いが残らない

ように精一杯がんばりたい。」といった言葉も見られた。(図3) A児が前向きに生活していることを、コメントから見取ることができた。それまでトートバッグに学習用具を入れて登校していたA児だったが、ランドセルを背負って登校するようになった。「悔いが残らないように精一杯がんばりたい。」という気持ちが、行動を変えたのだと確信した。

(3) 卒業式参加プロジェクトによる取組

卒業式に参加するという大きい目標を立てたことで、それに関わる活動に積極的に参加していく姿が見られた。A児への支援の一つとして、卒業式中の「喜びの言葉」を例年とは変更し、卒業生の台詞を作文にした。卒業生それぞれが、特に思い出に残っている行事や小学校生活で好きになったことなどについて、自分で書いた作文を読むこととした。A児は、過去自分が学校に来られなかったことを振り返った上で、「6年生での1年間が一番楽しかった。学校が楽しいと気づいた。」という旨の文章を書いた。卒業式練習全ての日程に参加し、卒業式当日も最初から最後まで、参加することができた。

(4) 進路相談プロジェクトによる取組

① 進学先決定

本人、保護者、担任、SCでの進路相談を綿密に行う中で、11月には特別支援学級(以下支援級と省略)在籍を希望し、市の就学相談を申し込むことにした。就学相談の結果、支援級在籍となった。在籍先が決まると、A児と保護者は、中学校の支援級に出向き、体験授業を受けたり、保護者が中学校の先生との面談をしたりした。

② 中学校での支援方法についての相談

進路相談では、SCのアドバイスを受けながら、保護者との意思疎通を行い、支援方法を考えた。中学校は、小学校より学級の人数が大幅に増えることもあり、A児が通常学級に入れない場合と入れた場合の両方の支援方法について考えた。5・6年生時、みんなと一緒に食べることができなかった給食についても、支援級で食べる方法があることを確認した。

③ 中学校入学式の支援についての相談

中学校の入学式については、小学校での状況を踏まえ、必要な支援を支援級の先生にお願いした。中学校入学前に、支援方法を確認したことで、A児は支援級の先生の支援を受けながら、中学校の入学式に無事出席した。また、授業については、通常学級に入って他の生徒と同様に参加しているという。さらには、給食についても通常学級で食べている。学校行事にも、支援なく参加できている。このように、通常学級に復帰したことについては、6年生後半に、A児が学校生活の楽しみを見いだし、積極的に活動しようとする意欲がもてるほどに回復し、自信を取り戻したことによって、中学校の通常学級で過ごすまでに弾みがついたのではないかと考えられる。

6 今後の課題

個別支援・学級づくり・学校支援体制づくりの3つの取組により、A児が少しずつ自信を取り戻し、自分らしく自分のペースで学習したり活動したりすることができるようになっていった。また、学級児童との関わりを少しずつもつようになり、コミュニケーションの幅を広げることができた。学校が怖いと感じていた4年時の不登校から回復の過程をたどって、学校が楽しいと感じ、みんなともっと一緒に過ごしたいと思うまでの、心と行動に大きな変容が見られた。

中学校進学という大きな節目を迎えるにあたり、小学校生活最後の1年をどう過ごすかという場面で、多くの支援をしてきた結果、不登校傾向解消へと結びついた。管理職を始めとした学校職員やSCの協力なしには、ここまでの支援をすることはできなかった。先行研究から学び、支援策を考え、職員やSCからのアドバイスを得て支援にあたった。

引用・参考文献

- ・石川大智「不登校の傾向がみられる児童の適応を促進するための取組～個別支援・学級づくり・学校体制の取組を統合的に行った実践を通して～」『教育実践研究』第30集, 2020年
- ・高橋雅彦「不登校児童を継続的に登校させるための取組～メンタルフレンド的な視点に基づく関わり方とルール・体制づくりを軸にした実践を通して～」『教育実践研究』第19集, 2009年
- ・村田裕昭「個に応じた支援による不登校解消への一考察～外部機関との連携を生かした不登校支援～」『教育実践研究』第29集, 2019年
- ・文部科学省「児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果の概要」2020年